



巻 頭 言

差 別 化

永 井 昌 平*

差別という言葉は元来あまり良い意味では使われないようである。しかし、この言葉が化けて、差別化という言葉になると、他より技術的に優れているなど、良い意味の言葉として市民権を得ている。差別化という言葉は主に製品開発のときに使われるが、研究の段階においても独創的な差別化技術、いわゆる基礎研究が重視されはじめた。

差別化技術といっても、材料、デバイス、ハード、ソフト、システムの各ステージでの差別化技術、さらには分野的広がりを見ると、その研究範囲は膨大なものになる。企業としても研究の範囲を広げてはいるが、本当の意味での基礎研究は、やはり大学に依存していかなければならない。

オイルショックをきっかけに盛んになった産学の研究協力は、どちらかといえば応用的研究が多く、企業にとってもメリットがはっきりしていた。いいかえると、企業の研究も大学の研究も、ほぼ同等な立場での協力であったように思う。こうした産学の協力もあり、日本の産業は飛躍的に発展してきたが、その背景として世界中の知的資産と資源を自由に使い、できた製品を自由に売ることができるといった優遇された条件があった。しかし、その条件にも制約が加えられようとしている。すなわち、世界中で使える知的資産を自ら生み出すことが期待されている。

こうした期待に応えるため、大学での研究はさらに基礎研究を指向することになる。企業側としては、基礎研究というリスクを理解したうえで物理的支援を長期的に続けることが重要であろう。今後、真の意味での差別化技術を生み出すためには、産学協力関係の質的変換が一つの課題と考える。

光学も研究の範囲がきわめて広がった。基礎研究を指向すれば、ますます研究範囲は広くなり、さらに広範囲の協力関係が必要となってくる。こうした意味で、研究成果をタイムリーに伝達できる学会誌の役割も重要になってくる。しかし、広範囲の研究成果を総花的に掲載したのでは読みにくい。「光学」も学会誌としての差別化を図り、いちだんと充実していくことを期待したい。